

存在文における定表現について

安藤裕介

On Definite Expressions in Existential Sentences

Yusuke ANDO

【要約】英語の存在文の意味上の主語が定表現である場合を、特殊な場合と見なさずに、一般的な定表現使用の問題の一つと見なす方が妥当であるということを論じた。その際に、定表現使用のための必要条件が満足されることが重要だと考え、その必要条件について細かく吟味しながら議論を展開した。また、情報価値の点、構造分析の点からも、英語の存在文の意味上の主語が定表現である場合について議論を行った。

【キーワード】意味上の主語、定性、必要条件、前方照応、後方照応、外界照応、語用論、不定、情報価値、構造分析、指示行為

0. 序

英語の存在文の意味上の主語の定性に関しては、最近20年程の間に多くの研究者が、自分の拠って立つ言語理論の立場から、多くの研究を次々と発表してきた。統語論の立場からは Safir (1987) 他、多くの言語学者が、意味論の立場からは Milsark (1974)、Keenan (1987) 等が、語用論の立場からは、Bolinger (1977)、Rando and Napoli (1978)、Abbot (1993) 等が、注目に値する知見を展開してきた。それぞれ、議論の価値ある研究ばかりなのだが、この問題に関する限り、その妥当性を検証しようとするれば、どうしても語用論的にならざるを得ないのは否定し難い事実であると思われる。それは、この構文が実際に使用される場合、それが使用されている状況の把握が、極めて重要な意味を有するからである。ゆえに語用論的アプローチが最も妥当性の高いものになるわけだが、その理由の細部については、この小論の議論の中で自ずと明らかになっていくと思われる。¹⁾

1. 定表現使用のための必要条件

英語の存在文の意味上の主語の定性の問題を考える場合、まず考慮しなければならないことがある。それは、この問題を英語という言語の現象の中でどの様に位置づけるかということと関わっている。つまり、この問題は、英語の存在文の中での特定の問題なのか、定表現に関する問題なのかということである。前者であれば、常に存在文が使用される状況の中での考察が中心になると思われる。後者であれば、定表現の使用される状況、条件の中での考察が中心になると思われる。要するに存在文の中での特殊な問題として処理するか、一般的な定表現使用の問題として処理するかの違いなのである。筆者自身は、個々の言語現象を常に一般的な問題として取り扱うことに長い間、関心をもってきた。もっと正

確に言えば、そのような立場からの研究が、より精緻な言語理論を構築する上で、極めて有効であると考えてきたのである。したがって、この小論では、後者の立場、即ち、この問題を、一般的な定表現使用の問題と見なす立場から議論を展開する。

上述した定表現使用という立場からの考察を進める場合、まず、問題になるのは定表現使用のための条件、厳密に言えば、必要条件が何かとすることである。筆者は安藤(1984)でそれについて提案を試みて以来、基本的に次の様な考え方が妥当であると思っている。

定表現使用のための必要条件が満足されるためには、コミュニケーションの参加者によってなされる3つの予備的仮説が重要である。その3つの仮説とは(i)定表現の指示物の談話世界における存在、(ii)定表現の指示範囲の適切な限定、(iii)定表現の真の同一指示であり、この3つが、話者と聴者の間で仮定されていると、話者が仮定、判断した時、その必要条件は満足されたと筆者は考えている。さらに厳密に言えば、その仮定、判断がなされた時、定表現とその指示物に関する共有知識が話者と聴者の間で成立するのであり、その定表現は、同一認定能力、位置選定力を有すると言える。究極的に、話者はその定表現がその状況において実現可能であるという信念をもつのであり、この信念こそが定表現使用のために必要不可欠なものと筆者は考えている。

この小論の中心的な章である次章では、上述した定表現使用のための必要条件が、存在文の意味上の主語²⁾の定性を考える場合に、どのように適用されていくかを詳細に考察する。そうする中で、筆者の取った立場、即ち、この問題を一般的な定表現使用の問題と見なす立場がより妥当性の高いものであるということが明らかになるだろう。

2. 存在文の意味上の主語の定性について

2.0. 序

一般に、(1), (2)に見られる様に、存在文の意味上の主語には、不定表現が現れるが、この小論で取り扱っていくのは、(3), (4)に見られる様に、存在文の意味上の主語に定表現が現れる場合である。

- (1) There is *a fire escape* right outside the window.
- (2) There were *a number of visitors* milling around the waiting room.
- (3) There are *those* who would claim that definites are impossible in existentials.
- (4) There was *the smell* of pot all over the apartment.

(以上 Abbot (1993))

2.1. 定表現の指示物の談話世界における存在

本節では、上述した(i)定表現の指示物の談話世界における存在について考える。指示物が現実世界に存在する(3), (4)の場合と同様に、定表現は(5)の様にそれが想像上の世界に存在する場合にも用いられ、各世界での指示物の存在の前提を伝えている。

- (5) There weren't *the funds* necessary for the project we had in mind.

Abbot (1993)

筆者は、この両世界を共に談話世界というレベルに投影して、統一的に処理した方が望ましいと考えている。したがって、問題になっている指示物が、談話の世界に存在するのだということを話者と聴者は了解事項としており、聴者の同一認定、同一指示についての理解はその了解を大前提としてなされると考えるのが妥当だろう。

上述した内容は、定表現の指示物という問題に関する限り、それが存在文であるかどうかとは関係なく、かなり一般的な主張であると言えよう。特に詳しく議論はしないが、次の様な存在文でない例で、それを確かめるだけで十分であろう。

(6) Mary put *the book* on the desk.

(7) Tom has never seen *the woman* with three heads.

(6)は現実世界に定表現の指示物が存在する場合、(7)は現実世界に定表現の指示物が存在しない場合である。状況は当然、異なるが、共に各世界での指示物の存在の前提を伝えている。また、その両世界を共に、談話世界というレベルに投影し、その指示物の存在を話者、聴者間の了解事項として、聴者の同一認定、同一指示についての理解はその了解を大前提としてなされるという分析は当然、可能である。

要するに、存在文の意味上の主語が定表現である場合にせよ、通常の設定表現を含む場合にせよ、基本的に同じ分析が可能なのであり、いずれの場合においても、話者はその定表現がその状況において実現可能であるという信念を、少なくともこの問題に関する限り、有していると言えるのである。

したがって、言うまでもないことかもしれないが、存在文の意味上の主語が定表現である場合にせよ、通常の設定表現を含む場合にせよ、先行文脈にその定表現の指示物が明示的に生起する必要はないのである。要するに、前方照応表現である必要はないのであり、外界照応表現の場合でも、上述した様な、話者がそれを使用する条件が成立すれば、話者は、それが実現可能であるという信念をもって、実際に使用するのである。

2.2. 定表現の指示範囲の適切な限定

本節では、上述した(ii)定表現の指示範囲の適切な限定について考える。この概念は、簡単に言えば、Hawkins(1978)の包括性という指示に関して射程範囲の広い意味論的概念と、実際の言語使用に関する語用論的概念とを融合したものと考えられる。即ち、意味論で指示物の可能な指示範囲を比較的、大きく捉えて、言語使用状況での適切さという語用論的概念で指示範囲を絞り込んでいるのである。したがって、かなり語用論に傾斜したものと言えよう。この概念の中では、*the sun*の様に状況に関係なく指示範囲が唯一的に限定されるものも、(4)の*the smell*、(5)の*the funds*の様に状況によってそれが限定されるものも、³⁾談話レベルに投影された時、特定の談話中、参加者の間で造られた局所的な心理モデルの中で適切に限定された指示範囲を有するものとして同一レベルで処理することが妥当であると考えている。ゆえに、指示物の適切な指示範囲について話者と聴者の間に了解があると話者は見なし、同一指示的言語表現を用いていると考えられる。

上述した内容は、やはり、定表現の指示物という問題に関する限り、かなり一般的な主張であると言えよう。

(8) Please pass me *the salt*.

(9) Close *the door*.

(8), (9)の *the salt*, *the door* が、発話の状況で指示しうるものは、通常、複数、存在するだろう。⁴⁾しかし、話者が意図している定表現の指示物を聴者が理解することは比較的、容易であろう。例えば、聴者に最も近いところにその指示物が存在するという理由で聴者はそれを理解、認知できるはずである。つまり、発話の状況の中で、意味論的に指示しうる複数の指示物が、語用論的处理過程を経て、唯一的に限定されるのである。

要するに、それらは、談話レベルに投影された時、関与者間で構築された局所心理モデルの中で適切に限定された指示範囲を有するものであるという話者、聴者間の了解があると話者は見なしており、結果として同一指示的言語表現が用いられているのである。

結局のところ、存在文の意味上の主語が定表現である場合にせよ、通常定表現を含む場合にせよ、基本的に同じ分析が可能であると言えよう。いずれの場合も、話者はその定表現がその状況において実現可能であるという信念を有しているのは言うまでもない。

ゆえに、この存在文の定表現の指示範囲においても、2.1.で述べた様に、上述したいずれの定表現の場合にも、先行文脈にその定表現の指示物が明示的に生起する必要はないのである。つまり、話者が定表現を使用する条件が成立しさえすれば、話者は、それが実現可能であるという信念をもって、実際に使用するのである。

2.3. 定表現の真の同一指示

本節では、上述した (iii) 定表現の真の同一指示について考える。

この概念は、談話中の定表現が、実際に何を指示するかという問題と関係しており、定表現の指示物が先行言語形式に明瞭に現れる前方照応の場合と言語形式に現れない外界照応の場合とに分けて考察する方が適切だと考えられる。⁵⁾ その際には、話者の意図を理解するための聴者の論理的推論の過程を中心にして分析が試みられる。本節では、議論の展開を円滑にするために、2.1, 2.2とは異なり、一般的な定表現の場合について考察した後で、存在文の場合について考える。

(10) (a) Mary got *some picnic supplies* out of the car.

(b) *The beer* was warm.

(Haviland & Clark (1974))

(10)は前方照応形式の例である。定表現の指示物を同一認定するという行為は、話者の意図を認知する為に、(この時、聴者は話者と同様のモデルを造ろうとしている) 聴者が連続的に行う解釈と推論の過程なので、(10a)の *some picnic supplies* と (10b)の *The beer* とが同一指示の関係にあると聴者が見なすためには、[Ⓐ] *Some picnic supplies include some beer.* という連想の推論と[Ⓑ] *The beer refers to some beer.* という同一認定の推

論が必要なのである。

外界照応の場合にも、前方照応の場合とやや手順は異なるが、ほぼ同様の推論が必要である。

(11) When you arrive in Mexico City, make your way to *the zócalo*.

(Lyons (1980))

(11)を聞いた聴者が、*the zócalo*がどんな物であるか十分に判らないという状況を考えてみよう。その様な状況でも、協調の原理⁶⁾を守っている聴者は通常、What is *the zócalo*?等と聞き返さずに文脈等から判断して、^③ *The zócalo means a particular place.* ^④ *The zócalo (that means a particular place) is in Mexico City.* という推論を行い、会話を協調的に進めていくのである。⁷⁾

要するに、前方照応の場合であれ、外界照応の場合であれ、談話レベルに投影された時、上述した様な推論過程を経て、関与者の間で構築された局所的な心理モデルの中で、その定表現は真の同一指示を有するものであるという話者、聴者間の了解があると話者は判断しており、結果として同一指示的言語表現である定表現が用いられているのである。

上述した内容が、議論中の存在文の意味上の主語が定表現である場合にも適用できることを次に考えてみる。

(12) (a) Is there *anything to eat*?

(b) Well, there's *the leftover chicken* from last night

(Abbot (1993))

上述した様に、前方照応の場合、定表現の指示物を同一認定するという行為は、話者の意図を認知する為に、聴者が連続的に行う解釈と推論の過程である。(12a)の*anything to eat*と(12b)の*the leftover chicken*が同一指示の関係にあると聴者が見なすためには、^⑤ *Anything to eat includes the leftover chicken.* という連想の推論と^⑥ *Anything to eat refers to the leftover chicken.* という同一認定の推論が必要なのである。

上述したことから明らかな様に、一般的な定表現の場合も、存在文の定表現も、前方照応の場合、同様の操作が適用可能であり、同一の枠組で扱うことが望ましいと言えよう。

続いて、存在文の定表現が外界照応の場合について考えてみる。

(13) There is *the strange book* in the room.⁸⁾

(Abbot (1993))

(13)の発話が成された段階で、話者と聴者の間には*the strange book*についての共有知識は成立していない。言わば、指示行為が明らかに共有知識成立に先行しているのである。しかし、指示物について全く共有知識が存在しなかったら、指示行為は不成功に終わるので、この場合、指示行為以前に指示物のPROTOTYPE⁹⁾についての共有知識がすでに成立していると思ふべきで、指示行為の結果、談話における特定の共有の知識が新しく成

立すると考えるべきである。したがって、この場合、聴者にとって⑥ *The strange book* ([LINGUISTIC FORM] told by Speaker) refers to *the strange book* ([PROTOTYPE]). ⑦ *The strange book* ([LINGUISTIC FORM] told by Speaker) refers to *the strange book that Speaker wants Hearer to find in that situation.* という同一認定の推論が必要なのである。つまり、協調の原理を守っている聴者は、以上の様な推論を行い、会話を協調的に進めていくのである。

ここまでの議論から明らかな様に、一般的な定表現の場合も、存在文の定表現の場合も、外界照応の場合、基本的には、同様の操作が適用可能であり、同一の枠組で取り扱うことが望ましいと言えよう。

本節での議論は、2.1, 2.2とは異なり、一般的な定表現の場合について考察した後で、存在文の場合について考えた。その様に議論の順序を変えたのは、これから取り上げる後方照応の場合に関しては、一般的な定表現の場合と比べて、存在文の場合に若干ではあるが特徴が見られるからである。

一般的な定表現の場合の後方照応の例についてはこれまで特に議論してこなかった。それは、筆者の定表現についての考え方においては、前方照応、外界照応の場合とは、議論のレベルが違うものと見なされ、あえて排除されてきたからである。しかし、存在文の場合において、意味上の主語が後方照応の定表現であるというのは、ごく普通に見い出すことができる。ゆえに、この後方照応の場合と筆者の枠組との相互関係について議論するのは極めて意義深いことであると言えよう。もう一つ言っておくべきことは、筆者は、定表現の真の同一指示ということに関して、後方照応の問題を取り扱おうとしているが、その議論を通して、定表現の指示物の談話世界における存在、定表現の指示範囲の適切な限定の問題も自動的に解決されるということである。

後方照応表現は、一般に、談話の中に、ある項目が導入されてはいないが、新しく導入された段階で唯一的に同一認定可能なものとして指定可能な場合、使用可能である。したがって特別な文脈化は必ずしも必要ではない。以下に例を挙げる。

- (14) I heard *the sound* of a band playing rock'n' roll music.
 (15) I know *the girl* who can speak Chinese.

共に、of 以下、who 以下が各々、後続することにより、不定表現が定表現に変えられた例と見なしうる。

次に、存在文の意味上の主語が定表現である例を挙げる。

- (16) There was *the sound* of a band playing rock'n' roll music.
 (17) There's *the possibility* that John will come in time.

(鈴木 (1977))

これらもやはり、共に、of 以下、that 以下が各々、後続することにより、不定表現が定表現に変えられた例と見なしうる。

上述したことから、一般的な定表現の場合も、存在文の意味上の主語が定表現の場合も

同様の操作が可能であるように思われる。基本的には、その様に言うことも可能だが、次の点で若干の違いがあると思われる。即ち、意味上の主語が不定表現であることが無標である存在文において、それが定表現であることは、それ自体、有標であると言えるが、後方照応表現を含む存在文においては、有標なものの中では最も無標なものを含んでいると言えよう。それは後続表現の付加により、不定表現が形式的に定表現に変化しているが、実質的には、不定表現の特性がほとんどそのまま維持されていると考えられるからである。その意味において、後方照応表現が意味上の主語である存在文は、無標の存在文の構造に近いものと言えよう。今、述べた様な事は、一般的な後方照応表現の場合には必ずしも適用できない事だと思われる。ゆえに、その点からは2つの定表現の間に若干の相違があると思われるが、基本的な形式上の操作に関しては上述した様に同様の処理が可能だと思われる。

筆者が前方照応表現と外界照応表現の場合とは、議論のレベルが違うものであると後方照応表現を理解したのは、前者二つの場合、話者、聴者の推論過程が重大な位置を占めるが、後者の場合、推論過程がそれほど大きな位置を占めないからである。即ち、後方照応表現においては形式的操作の側面が強いと言えるのである。その意味において、前者2つの照応表現と後方照応表現は、区別されるべきだと思われる。(もちろん、上述した様に3つの照応表現ともに、基本的には、一般的な定表現使用の問題から、存在文の定表現を把える立場が妥当であるとは考えられるけれども。)ゆえに、推論過程を重視する筆者の枠組と後方照応の定表現とは、完全に収束されるわけではないが、決して相容れないものではないという関係を有していると規定できよう。

最後に、後方照応表現における定表現使用のための必要条件が満足されるための3つの仮説 (i) 定表現の指示物の談話世界における存在、(ii) 定表現の指示範囲の適切な限定、(iii) 定表現の真の同一指示について考える。(i)については特に議論の必要もないと思われる。前方照応、外界照応の場合、定表現と指示物(先行文脈に存在するにせよ、外界に存在するにせよ)との間での指示関係が重要であるが、後方照応の場合、定表現それ自体が指示物であるので、その指示関係はそれ程、重要ではない。即ち、定表現の成立が、その指示物の談話世界における存在を意味するのである。ゆえに、(i)の仮説は、後方照応表現の場合にも満足されると考えられる。(ii)に関しても、後方照応表現の場合、of表現、関係詞節等¹⁰⁾によって、定表現が修飾されるので、その意味において、定表現の指示範囲は適切に限定されると考えられる。即ち、構造自体が(ii)を満足する過程を包含していると考えられるのである。いずれにせよ、(ii)も満足されるのは明白である。(iii)に関しても、同様のことが言える。上述した様に、後方照応の場合、定表現それ自体が指示物であるので、定表現の真の同一指示が満足されているのは前提とも言える事であるから、(iii)も満足されるのは明白である。以上の様に、後方照応表現の場合も3つの仮説は満足されていると考えられる。

2.3. まとめ

本章では、存在文の意味上の主語の定性の問題を一般的な定表現使用の問題と見なす立場がより妥当性の高いものであるということを論じてきた。ここでの細かい問題点については後述することにする。

3. 存在文の意味上の主語の定性についての発展的知見

3.0. 序

本章では、存在文の意味上の主語の定性についての発展的知見について2つの観点から述べる。1つは情報価値という観点からであり、もう1つは構造分析という観点からである。

3.1. 存在文の意味上の主語の定性と情報価値

本稿で取り扱ってきた存在文の意味上の主語が定表現である場合も、一般の定表現の場合と基本的には同様の操作が可能であることがここまで論じられてきた。ここでは、そうではあるにしても、即ち、中核の部分では両方の定表現が同じものだと見なせるが、周辺の点では違いがあるということを論じていく。

一般の定表現と存在文の定表現では、情報価値の点で明らかに違いが見られる。即ち、一般の定表現は、定表現であるがゆえに、情報価値の点から『旧』情報であると考えられるが、存在文の定表現は、定表現であっても、情報価値の点から『新』情報の側面を談話の上から担っていると言える。換言すれば、存在文の定表現は、形式上『定』であっても、意味上、『不定』という側面があると言えるのである。¹¹⁾

ただし、上の記述には注意すべきことが1つある。上述したことも関連するが、存在文の定表現は、形式上『定』であっても、意味上、『不定』という側面がある、と言っても、前方照応、外界照応と後方照応とでは、『不定』という点に関して程度差があると考えられるのである。即ち、後方照応の定表現は、関係詞節等の付加により、形式的に不定表現から定表現に変えられた側面が強いので、一定の尺度の中で、最も『不定』に近い点を示す『定』用法であるが、前方照応、外界照応の定表現は、一定の尺度の中で、『定』用法の最上位ではなくて、構造上、『不定』的な側面も有している用法と言える。その意味において、後方照応表現より『不定』の度合いが少いと言える。しかし、いずれにせよ、この3つの表現は、程度の差こそあれ、情報価値の点から『新』情報の側面を担っているという点では、共通の特性を有していると言えよう。

3.2. 存在文の意味上の主語の定性の構造分析

存在文の意味上の主語が定表現である場合と不定表現である場合とでは次の様に構造の相違が見られる。

- (18) (a) There's [*a book*] [*on the table*].
 (b) There's [*the book on the table*].

要するに、(18a)の様に不定表現の場合には、不定表現と前置詞句が別々の構成素を成すが、(18b)の様に定表現の場合には、定表現と前置詞句が1つの構成素を成しているのである。ゆえに、(18a)の *on the table* を前置することは可能だが、¹²⁾ (18b)の *on the table* を前置しても許容されない。

- (19) (a) *On the table, there's a book.*
 (b) **On the table, there's the book.*

この様に構造の相違が生じるのは、やはり情報構造が関与していると言えよう。厳密に言えば、際立ち、重要度と密接に関った情報構造が関与していると言えよう。(18a)の場合、*a book*は純粹に新情報であり、それゆえに重要度が高く、最も際立った項目であり、したがって独立した単位と見なすことが可能である。(18b)の場合、*the book*は、情報価値の点からは『新』であるが、形式上、『旧』であり、それゆえに、重要度がそれ程、高くなく、最も際立った項目と見なすにはそれだけでは不十分であり、構造上、*on the table*との結合が必要不可欠である。結果として、独立した単位と見なすことが不可能と言える。いずれにせよ、ここでは、存在文の場合、定表現と不定表現とでは構造上の相違があるということが明らかになったと思われる。

4. 今後の研究課題

本稿では、存在文の意味上の主語の定性が一般的な定性理論から説明できることを論じてきた。本稿を終えるにあたり、本章では、存在文の意味上の主語の定性に関して、本稿で取り扱わなかった問題を3点ほど提示することにする。

第1点目は、後方照応の定表現の指示物についてである。本稿では、後方照応の定表現それ自体が指示物であるという立場を取った。が、後方照応表現を前方表現、外界照応表現の変異形と見なす立場もある。その場合には、当然のことながら、指示物が存在するわけだから、定表現とその指示物の指示関係が問題になってくる。その場合の指示関係については、その推論過程を踏まえて、今後、議論していく必要があるだろう。

第2点目は、存在文の意味上の主語が不定表現である場合、即ち、無標の場合との比較、対照に関してである。Breivik (1981)によれば、「目前に具体物が視覚化されて展開していく感じ」(“visual impact”)が満足されない限り、意味上の主語が不定表現である存在文は成立しえないと述べている。ゆえに、存在文の意味上の主語が定表現である場合には、上記の visual impact は満足されないわけである。だとすれば、意味上の主語が定表現である存在文を規定するような、不定表現の場合の visual impact に対応するような語用論的概念は存在するのだろうか？ 存在するとしたらどのような概念なのか？この点についても、今後、研究していく必要があるだろう。

第3点目は、この存在文の普遍性と関与している。英語の There 構文のみをこの小論では扱ってきたが、他の言語にも、英語の There 構文に対応する存在文が散見されるようである¹³⁾。例えばドイツ語の *es gibt*、フランス語の *il y a* 等がそれである。このような他言語の存在文との定性主語に関する比較は非常に意義があると思われる。もちろん、その発展段階としての他言語における、一般的な定表現と存在文の定表現の比較、相互関係についても議論をする意義は十分にあるだろう。いずれにしてもかなりの困難を伴うが、普遍文法構築という点から見れば、非常に有意義なものであろう。

いろいろと今後、研究すべき点を残してはいるが、本稿での知見が存在文研究、定性研究の一助になることを願う次第である。

注

- 1) この構文のこの問題を統語論的、意味論的立場から行った場合の問題点については、Abbot (1993) を参照せよ。
- 2) 存在文の文頭の There を形式上の主語、be 動詞等の動詞の後に生起する、実質的に主語の機能を担っている名詞句を意味上の主語として本論では区別する。
- 3) (4)の *the smell* の場合、of pot によって、(5)の *the funds* の場合、necessary 以下によって限定されている。
- 4) もちろん、その状況において、定表現の指示物がただ一つしか存在しないと容易に考えられる場合は、この考察の範囲外である。
- 5) 本稿で議論している直接的指示関係の場合とは異なり、定表現と指示物の間に間接的指示関係が成立している場合については、議論のレベルがやや異なるので、ここでは考察の対象としない。
- 6) この原理の詳細については Grice (1975) を参照せよ。
- 7) ここでの議論の詳細については安藤 (1984) を参照せよ。
- 8) この例が、前方照応の例であるという解釈も、状況によっては当然、成立する。
- 9) この概念については、安藤 (1984) を参照せよ。
- 10) 他に同格節等も後方照応の定表現に付加されうる。
- 11) ここでの記述については鈴木 (1977) を参照せよ。
- 12) 焦点の変化は見られるが、論理的意味は変化していない。
- 13) この点については Abbot (1993) を参照せよ。

参 考 文 献

- Abbot, B. 1993. "A Pragmatic Account of the Definiteness Effect in Existential Sentences." *Journal of Pragmatics* 19, 39-55.
- 安藤裕介 1984. 「英語における定冠詞の使用原理とその心理言語構造モデル」『Cairn』第27号, 63-78.
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- Breivik, L. E. 1981. "On the Interpretation of Existential *There*." *Lg* 57: 1, 1-25
- Grice, H. P. 1975. "Logic and Conversation." P. Cole & J. L. Morgan. (eds), *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York: Academic Press.
- Haviland, S & Clark, H. H. 1974. "What's New? Acquiring New Information as a Process in Comprehension." *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 13.
- Hawkins, J. 1978. *Definiteness and Indefiniteness: A Study in Reference and Grammaticality Prediction*. London: Croom Helm.
- Keenan, E. L. 1987. "A Semantic Definition of 'Indefinite NP'." E.J.Reuland & A.G.B. ter Meulen. (eds), *The Representation of (In)Definiteness*. Cambridge, MA: MIT Press. 286-317.

- Lyons, C. G. 1980. "The Meaning of the English Definite Article." van der Auwera, T. (ed), *The Semantics of Determiners*. London: Croom Helm.
- Milsark, G. L. 1974. *Existential Sentences in English*. Doctorial Dissertation, MIT.
- Rando, E. & D. J. Napoli. 1978. "Definiteness in *there*-Sentences." *Lg* 54: 2, 300-313.
- Safir, K. J. 1987. "What Explains the Definiteness Effect?" E. J. Reuland & A.G.B. ter Meulen. (eds), *The Representation of (In)Definiteness*. Cambridge, MA: MIT Press 71-97.
- 鈴木英一 1977. 「存在文の意味上の主語と定性・不定性」『山形大学紀要（人文科学）』 8 : 4, 517-543.